

内外教育

2019年(平成31年)4月2日(火) 第6739号
(購読料金 税抜月額4,000円)

●昭和21年12月12日 第3種郵便物認可 ●毎週2回火・金曜日発行
(但し祝日等を除く) ●発行所 〒104-8178 東京都中央区銀座
5丁目15番8号 時事通信社 ©時事通信社2019
誌面内容に関するお問い合わせ(編集部) educate@grp.jiji.co.jp
ご購入に関するお問い合わせ(業務管理部) dokusya@jiji.co.jp

 時事通信社

目次

〈あすの教育〉

山崎剛金沢美術工芸大学学長に聞く
基礎重視し社会に対応できる強さ育む……2~3
新課程の難問めぐり激しい議論
総合初等教育研究所第22回セミナー……4~5

〈特集〉子どもの「語り・つぶやき」から探る
児童養護施設における発達の困難と支援ニーズ
(上)
高橋 智・東京学芸大学教授、ほか……6~9

〈調査〉若年層の6割、消費者被害に不安
18歳成人で内閣府調査……10~11

戦略的な運営の在り方を検討
大学基準協会が「学長セミナー」……12~13
不登校「なぜ続いているのか？」
国立教育政策研が指導主事向け資料作成……14

〈アンテナ・スポット〉

▷学校と家庭つなぐシステム導入▷教員への人的サポート倍増▷学校の携帯持ち込みで指針▷全小
学校で放課後学習▷いじめ認知も「重大」扱いせず▷教育センター所長ら表彰▷児童虐待防止条例
を検討▷「免許失効・取り上げ」検索ツール
……15~17

〈文科省三役の定例記者会見・抄録〉
3月19日(火) 柴山昌彦文科相……17

〈教育関係の新刊書コーナー〉……18

〈教育法規あらかると〉
夜間中学と外国人の教育機会……19

〈ラウンジ〉甲子園と部活問題……20

授業から深い学びへ

敬愛大学客員教授・武内 清



「教育的な見方」が陥りがちな二つの傾向がある。一つは教育の高い理想や目標を掲げ、それに達していない教育の現実を非難・叱咤すること。もう一つは学校の授業だけに注目し、子どもたちが授業以外で学んでいることを軽視すること。

教育現象を考察するとき、理想より現実から考えることが大事である。また、授業だけでなく学校や教師や子どもを取り巻く社会的要因(潜在的カリキュラム等)に注目しないと現実的ではない。このことは教育や子どもの現実をただ追認すればよいというわけではない。客観的現実がなくても主観的な思い込み(予言)によって現実が生み

出される場合がある(予言の自己成就)。教育の理想や教育改革への熱意が教育の現実を作りだす。また教育は受け身でいるとその効果は小さく、主体的に関わることでよって達成度が高まる。

その意味では、新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」の考え方は有効である。それは、抽象度が高い言葉だけに、かなりの自由度がある。文部科学省による細かい規定や解説は要らない。

溝上慎一は「深い学び」のエッセンスを「関連づけ」としている(「学習とパーソナリティー」東信堂)。教えられる知識や技術を、学習者が自分の興味関心や認知と関連づけて受け取り(アウ

トサイド・イン)、自分の言葉で他者に伝え、行動に移していく(インサイド・アウト)。汎用性のある知識を学ぶと、それが他のさまざまなことに応用が利くということである。その意味で、最初に学校の授業で基礎的で汎用性のある知識をきちんと学ぶことが大事である。巷には情報が溢れ、どの知識を選択すべきか迷う。人類の知識のエッセンスを、教員の工夫した授業から学び、それを各自のさまざまな学習や行動に結び付けていく。

学びの質も高めたい。それは外部の基準で計られる学力ではなく個々の学習者がどこまで学んでいるかを自覚できて、次の目標に向けて努力することを促す「生成する知識」の修得である。

